



横浜みなとみらいホール

プロデューサーinレジデンス 2025-2027

令和7年度石田泰尚の弦楽合奏部応援プロジェクト

事業報告書

2026年4月

横浜みなとみらいホール(公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団)

プロデューサーinレジデンス 2025-2027
「石田泰尚の弦楽合奏部応援プロジェクト」
令和7年度 実施報告書

実施期間：令和7(2025)年6月～12月

(1) 事業概要

本報告書は、2025年6月から12月にかけて実施した、横浜みなとみらいホール プロデューサー 石田泰尚(ヴァイオリニスト)によるプロデュース事業「弦楽合奏部応援プロジェクト」の内容と成果を整理・記録し、今後の活動につなげることを目的とするものである。

本プロジェクトは、横浜市立の中学校・高等学校における弦楽部を対象に、第一線で活躍するプロの演奏家が直接指導にあたることで、生徒が高度な音楽表現に触れ、合奏の喜びと到達点を実感する機会を創出することを目的として企画された。2カ年実施を予定しており、2025年度は初年度にあたる。

単発のワークショップではなく、【6月・7月：各校での個別指導(基礎段階)】、【11月：成果発表に向けた3校合同リハーサル(発展段階)】、【12月：みなとみらいホールでのゲネプロと成果発表(実演・到達段階)】という段階的な構成をとり、演奏者からの学びが時間をかけて定着・深化していくプロセスを重視した点に本事業の特徴がある。

(2) 弦楽合奏部応援プロジェクト実施スケジュール

回	実施月日	時間	会場	指導内容	参加者数	講師(敬称略)
1	6月16日(月)	15:30-18:30	南高等学校、附属中学校	練習	28	石田泰尚(Vn)、弘田徹(Vc)
2	6月17日(火)	15:50-18:30	桜丘高等学校	練習	14	石田泰尚(Vn)、大宮臨太郎(Vn)
3	7月23日(水)	14:00-16:00	桜丘高等学校	練習	10	石田泰尚(Vn)、大宮臨太郎(Vn)、弘田徹(Vc)
4	7月24日(木)	10:00-12:00	金沢中学校	練習	11	石田泰尚(Vn)、大宮臨太郎(Vn)
5	7月24日(木)	14:00-16:00	南高等学校、附属中学校	練習	25	石田泰尚(Vn)、大宮臨太郎(Vn)
6	11月17日(月)	16:45-18:15	MMHリハ室	3校合同合奏練習	43	石田泰尚(Vn)、中村洋乃理(Va)、弘田徹(Vc)
7	12月29日(月)	9:30-10:00	MMH大ホール	リハーサル	42	石田泰尚、石田組メンバー
8	12月30日(火)	11:30-11:45	MMH大ホール	ゲネプロ	43	石田泰尚、石田組メンバー
9	12月30日(火)	13:20-13:30	MMH大ホール	プレ演奏会(成果発表)	43	石田泰尚、石田組メンバー

※MMH:横浜みなとみらいホール

(3) 指導体制

指導陣は、石田泰尚が主導し、石田組メンバーが各パートの指導にあたった。演奏技術の指導にとどまらず、アンサンブルにおける聴き合い、アイコンタクト、楽譜に記載されているように忠実に演奏すること、など合奏を成立させる本質的要素を重視した指導を行った。

※石田組とは 石田泰尚の呼びかけにより結成された弦楽合奏団。旗揚げ公演は2014年に横浜みなとみらいホールで開催された。プログラムによって様々な編成で演奏をするスタイルを取っており、“石田組長”が信頼を置いている首都圏の第一線で活躍するオーケストラメンバーを中心に“組員”が招集される。

指導者(石田泰尚と石田組メンバー):
石田泰尚(ヴァイオリン)
中村洋乃理(ヴィオラ)※11月・12月のみ
弘田徹(チェロ)
大宮臨太郎(ヴァイオリン)※6月・7月のみ

(4) 訪問した学校の紹介

① 横浜市立南高等学校・附属中学校 弦楽部
参加者内訳:参加生徒合計24名 担当教員:2名

②横浜市立桜丘高等学校 弦楽部
参加者内訳:参加生徒合計 10 名、教員 2 名

③横浜市立金沢中学校 弦楽部
参加者内訳:参加生徒合計 9 名、教員 2 名

学年別参加者数

学年	桜丘高等学校	南高等学校 附属中学校	金沢中学校	学年合計
中学2年生	-	7	7	14
中学3年生	-	9	2	11
高校1年生	5	6	-	11
高校2年生	5	2	-	7
合計人数	10	24	9	43

パート別参加者数

パート	桜丘高等学校	南高等学校 附属中学校	金沢中学校	合計
ヴァイオリン (Vn) 1	2	6	3	11
ヴァイオリン (Vn) 2	2	5	2	9
ヴィオラ (Va)	2	5	1	8
チェロ (Vc)	3	5	2	10
コントラバス (Cb)	1	3	1	5
合計人数	10	24	9	43

(5) 6月・7月:各校での個別指導(基礎段階)

6月下旬と7月下旬、各2日間にわたり3校を訪問し、各校の実情に即した弦楽指導を行った。対象曲はいずれもホルスト《セントポール組曲》を中心とし、一部学校では《弦楽セレナード》やポピュラー作品も取り上げた。

指導の大きな特徴は、「言葉で説明する」ことよりも、「音で示す」ことに重きを置いた点である。石田泰尚は必要最小限の言葉で要点のみを伝え、あとは隣で一緒に弾くことで、音色・呼吸・テンポ感を体感させた。大宮臨太郎および弘田徹は、それを補完する形で、弓の使い方、リズムの取り方、アンサンブル内での役割分担を具体的に言語化した。



生徒たちは当初、プロ奏者を前に緊張した表情を見せていたが、石田が実際に隣で音を出した瞬間、空気が一変した。言葉よりも音によって示される呼吸、フレーズの方向性、テンポの揺れに、生徒たちは必死に食らいついていく。

桜丘高校 1st ヴァイオリンの生徒は、終始コンマス席の石田から目を離さず、弓の動きと体の使い方を一つ残らず吸収しようとしていた。後日、「言葉で説明されるよりも、音で示してもらったほうがずっと分かりやすかった」と振り返っている。

楽譜を追うことに精一杯だった視線が、次第に顔を上げ、周囲の音を聴き、コンマスや隣のパートを見るようになる。短い時間の中で、「合わせる」という行為の意味が、理屈ではなく感覚として共有されていく過程がはっきりと感じられた。

南高校チェロの生徒は、石田からかけられた「自信を持って。もう弾けているから」という一言を、その後の練習期間も繰り返し思い出していたという。この言葉が、テストや行事で練習時間が限られる中でも、音楽に向き合う支えになっていた。

(5) 11月:成果発表に向けた3校合同リハーサル(発展段階)

11月には、横浜みなとみらいホールのリハーサル室にて、3校合同による初めての合奏を実施した。学校や学年の異なる生徒が一堂に会し、ひとつの音楽を作るという経験は、生徒にとって大きな挑戦であった。

広いリハーサル空間とプロのスタッフによるセッティングは、生徒にとって非日常的な環境であり、最初は戸惑いも見られた。しかし、通し演奏が始まると、7月の指導で培われた基礎が随所に表れ、大きな破綻なく最後まで演奏することができた。



指導では、例えば4小節単位のフレーズで合わせる意識、パートトップ奏者同士のコンタクト、弱音時の緊張感の保持など、より高度なアンサンブルの要点が提示された。また、フレーズを切らないために譜めくりをせずに済むようにするための譜面準備の仕方といった、プロの現場に通じる実務的な視点も共有された。

とりわけ印象的だったのは、2楽章冒頭で音程が揺れた場面での「ひるんじゃダメ」という短い一言である。理由や方法を説明する前に、まず“音楽として前に出る覚悟”を求めるその言葉は、生徒たちの音の出方を即座に変えた。言葉を発するまでに長い沈黙を挟み、最もふさわしい表現を探す姿は、生徒に対して誠実に向き合っている証でもあり、その空気感自体がリハーサル室に強い集中を生んでいた。

「ひるまない」「喜びを感じて弾く」といった石田の言葉は、技術的な指示というよりも、演奏に向かう姿勢そのものを示すものであった。



(6) 12月:みなとみらいホールでのゲネプロと成果発表(実演・到達段階)

12月末、横浜みなとみらいホール大ホールにて、石田組公演の一環としてプレ演奏を行った。本番前に実施された短時間のゲネプロでは、ホールの響きを確認めながら、これまで積み重ねてきた成果を確認した。



撮影：藤本史昭

11月時点で課題となっていた箇所は着実に改善され、テンポ感、ダイナミクス、低弦による支えなど、合奏としての完成度は明らかに向上していた。指導陣から多くの言葉が寄せられることはなく、それ自身が「問題なく音楽が成立している」ことの証左であった。

本番のプレ演奏では、リハーサル以上の集中力と推進力が感じられ、音楽が生き生きと前に進んでいった。石田のペースに弦楽合奏が応え、それが更に推進力を増しているよう。テンポが早くなってもみんながついていく。生徒たち自身の感情が自然と音に乗り始めているのが分かった。

金沢中学校 2nd ヴァイオリントップの生徒は、譜面を見る時間を最小限にし、石田と積極的にアイコンタクトを取りながら演奏していた。11月合同合奏で繰り返し指摘された2楽章冒頭の入りも、この日は迷いなく音が立ち上がり、半年間の積み重ねが確かな形となって表れていた。一度きりの本番が持つ緊張感と高揚感が、アンサンブル全体を一段引き上げていた。生徒たちは、1回限りの本番が持つ特別な力を、身体感覚として体験したと言える。

弦楽合奏部応援プロジェクト・プレ演奏(成果発表)

日時:2025年12月30日(火) 13:20~13:30
 会場:横浜みなとみらいホール 大ホール
 ※石田組年末感謝祭 2025 の開場中に、ステージ上で開催

石田組年末感謝祭 2025 本公演

日時:12月30日(火) 14:00~16:30
 会場:横浜みなとみらいホール 大ホール
 出演:石田泰尚、石田組メンバー(計23名)
 料金:全席指定 S席(1・2階正面席):6,500円
 A席(2階バルコニー席・P席・3階席):5,500円
 大学生 各席種:3,000円
 高校生以下 各席種:2,000円
 65歳以上・障がい者手帳をお持ちの方
 S席:6,100円、A席:5,200円
 公演入場者数:1,933名

石田組年末感謝祭2025
 弦楽合奏部応援プロジェクト・プレ演奏

出演: 横浜市立南高等学校弦楽部、横浜市立桜丘高等学校弦楽部、横浜市立金沢中学校弦楽部、横浜市立南高等学校附属中学校弦楽部

石田組メンバー
 第1ヴァイオリン 石田 泰尚、山岸 努
 第2ヴァイオリン 直江 智沙、丹羽 洋輔
 ヴィオラ 中村 洋乃理、石田 紗樹
 チェロ 弘田 徹、大宮 理人
 コントラバス 米長 幸一、高山 智仁

12/30のみ開催
 13:20~13:30
 ステージ上で演奏!

■自序音楽 小島 敏一
 クスターワ・ホルストは1849年、イングランド西部のタレスターでスウェーデンの移民の家族に生まれた。音楽が大好きな彼は、幼少時から作曲、演奏と音楽活動が大好きで、1871年、22歳の若さで作曲の道に進む。1892年の作品「ホルストの交響曲第1番」は、その才能の中心にあり、その後の音楽界に大きな影響を与えた。この交響曲は、ホルストの代表作として知られており、その後の音楽界に大きな影響を与えた。この交響曲は、ホルストの代表作として知られており、その後の音楽界に大きな影響を与えた。

石田組内の弦楽合奏部応援プロジェクト・出演メンバー

横浜市立金沢中学校 弦楽部
 ヴァイオリン 松本 悠、川口 真由、藤田 悠、川口 真由、藤田 悠
 ヴィオラ 藤田 悠
 チェロ 藤田 悠
 コントラバス 藤田 悠

横浜市立桜丘高等学校 弦楽部
 ヴァイオリン 松本 悠、川口 真由、藤田 悠、川口 真由、藤田 悠
 ヴィオラ 藤田 悠
 チェロ 藤田 悠
 コントラバス 藤田 悠

横浜市立南高等学校 附属中学校 弦楽部
 ヴァイオリン 松本 悠、川口 真由、藤田 悠、川口 真由、藤田 悠
 ヴィオラ 藤田 悠
 チェロ 藤田 悠
 コントラバス 藤田 悠

主催: 横浜みなとみらいホール(公益財団法人 横浜市公共文化施設財団)
 助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(楽・時・空間芸術活性化推進事業) 地域の伝統文化・芸術を中心に開催(公益財団法人 津田町文化財団)

出演:

横浜市立南高等学校・附属中学校 弦楽部(24名、教員2名)
 横浜市立桜丘高等学校 弦楽部(10名、教員2名)
 横浜市立金沢中学校 弦楽部(9名、教員2名)
 第1ヴァイオリン:石田泰尚、山岸 努
 第2ヴァイオリン:直江智沙子、丹羽洋輔
 ヴィオラ:中村洋乃理、石田紗樹
 チェロ:弘田 徹、大宮理人
 コントラバス:米長幸一、高山智仁

曲目:ホルスト:セントポール組曲(第1楽章、2楽章、4楽章)

プレ演奏の様子(YouTube 公開): <https://youtu.be/xhC4BpnLnAk>



撮影: 藤本史昭

【参加生徒アンケートより】

- 強弱についてアドバイスを頂いた部分を意識したら、思った以上に体力を使い、今までは意識しきれていなかったのだと気付きました(南高等学校 2年)
- すごく丁寧で優しい。弾き方や呼吸、指使いを、音楽で伝えてくれる。言葉で説明されるよりも、音で示してもらおうほうがずっと分かりやすかった(桜丘高校 3年 1st ヴァイオリン)
- (コントラバスのバランスについて)一聞いて十返ってくるほど丁寧なアドバイスで、これまでのどの先生よりも分かりやすい(桜丘高校 3年)
- 隣で弾いていて、音色の透明感と丁寧さに驚いた。弓の使い方を細かく教えてもらえて、すごく分かりやすかった(金沢中学校 2年)
- 6月に石田さんから、自信を持って。もう、弾けてるんだから、と言われたことが、ずっと心に残っていて……テストや行事で練習時間が十分に確保できない中でも、その言葉がみんなで頑張る支えになった(南高等学校 2年)

【(講師)石田泰尚のコメント】

- プロの音を浴びてほしい。言葉よりも、弾いて見せることが一番だと思っています。
- (6月と7月の時のみなさんの音は、11月になって)全然違う。すごく良かった。中学生から弦楽器を始めた子が多いだろうけれど、それを考えたら本当にすごい。せっかく、横浜みなとみらいホールで弾くんだから、喜びを感じてほしい。“喜びを感じて”と言うだけで音が変わる。それが嬉しい。
- (みなさんは)プロを目指すわけではないと思うけれど、こうやって一緒に弾いたこと、大人になっても趣味でも良いから、音楽を続けてほしい。楽しんで弾いてほしい。

担当者振り返り

本事業の主眼は、第一線で活躍する演奏家との直接交流を通じ、技術を超えた刺激を生徒に与えることにあった。

指導陣は明確な役割分担を敷いた。石田泰尚はコンサートマスターとして「背中で示す」演奏リードに専念し、石田組の各メンバーが具体的な技術指導や言語化を補完。当初は緊張していた生徒たちも、この実践的なスタイルに触れることで、次第に能動的な合奏姿勢へと変化していった。

約半年にわたる指導の集大成として、有料公演のプレコンサートに出演したことで、プロと舞台を共にする極めて高い緊張感の中で、生徒たちは技術向上のみならず、アンサンブルにおける聴き合いやプロとしての礼儀、感謝の念といった「音楽に向き合う姿勢」を深く習得した。

石田は終始「言葉以上に音で語る」姿勢を貫いた。「やればわかる」という信念に基づき、音楽が成立していれば信頼して任せるその態度は、生徒にとって極めて価値の高いロールモデルとなった。言葉よりも、弾いて見せることが一番だと考えており、言葉は少なくとも、丁寧に寄り添いながら音で語りかける音楽家であった。終演後の「ありがとうございました。またどこかで会いましょう」という簡潔な言葉には、関わった全員への敬意と、生徒の未来への願いが凝縮されていた。

学校や校種の枠を超えた合同合奏の成功は、生徒の視野を広げ、協調性を育むとともに、公立学校における弦楽教育の可能性を実践的に証明し、教育委員会等からも高い評価を得た。本事業の真の成果は、数値化できる上達に留まらない。プロの音を間近で浴び、共に奏でたという身体的な記憶こそが、生徒たちが今後も音楽と関わり続けるための確かな基盤となった。

事業企画グループ 担当リーダー 中村康裕

プロデューサーに就任し、石田がまず取り組みたいと語ったのが、地域の一般の学生と交流だった。憧れとなるような演奏者の姿を目の当たりにし、しかも一緒に演奏することは、市内の中学生高校生に一生の記憶として印象づけられると担当者の中では期待感が高まり、顧問の先生方からの、期待感が高かった。しかし学生は案外、石田泰尚の演奏に触れたことがなかったようで、ただただ緊張する場面も一回目の指導では感じられた。しかし、石田の「手本を見せる」「徹底してリードをする」スタイルを感じ取って、学生が石田に導かれてアンサンブル出来ていく様子は、初回より驚きであった。全体的な今回の指導体制は、報告書の記載のとおりで、演奏にあたっての技術や音楽上の言葉でのアドバイスは石田組メンバーが行って、石田泰尚は日本有数のコンサートマスターとして学生を率いることに専心していたように思う。しかし彼らの要望に応えようと、技術的に大変だった学生はいたと思うが、7か月近い学校の部活の指導のおかげもあり、「石田組年末感謝祭」という有料コンサートのプレ演奏として、大変な好評を得るものとなった。

事業企画グループ チーフプロデューサー 菊地健一

